

令和6年度 浜松市立光が丘中学校 学校評価報告書

1 アンケート結果から見られる全体的な捉え

(1) 生徒による学校評価結果より

普段の学校生活における質問項目において、どの学年にもおおよそ同じような傾向が見られた。まず、生徒同士や、生徒と教員間の人間関係に関して、また、学校活動における行事への取り組みに関しては、どの学年でも「あてはまる」「ややあてはまる」が80%後半から90%台を占めており、本校が安心して学校生活を送ることができ、授業や行事に意欲的に取り組むことができる場になっているということがうかがえる。

一方で、学年による傾向の違いから80%以上を示しているものもあるが、どの学年でも共通して80%台を割る傾向が強かった質問項目が以下の5点である。

・「学習には自ら進んで取り組むことができている。」

1年：86.7%（第1回） → 72.7%（第2回）

2年：72.7%（第1回） → 83.8%（第2回）

3年：77.6%（第1回） → 79.3%（第2回）

・「自分は近所の人達とも話をする事ができる」

1年：77.8%（第1回） → 79.5%（第2回）

2年：70.9%（第1回） → 69.2%（第2回）

3年：79.4%（第1回） → 77.6%（第2回）

・「自分には、将来、やりたいことや挑戦したいことがある。」

1年：88.9%（第1回） → 88.6%（第2回）

2年：80.0%（第1回） → 78.8%（第2回）

3年：75.9%（第1回） → 74.1%（第2回）

・「悩みや困ったことがあるときは、家族に相談している」

1年：95.6%（第1回） → 90.9%（第2回）

2年：78.2%（第1回） → 84.6%（第2回）

3年：74.1%（第1回） → 81.0%（第2回）

・「家では、時間をうまく使い、やるべきことを楽しむことの区別をつけ、有意義に時間を使っている。」

1年：82.2%（第1回） → 86.3%（第2回）

2年：74.6%（第1回） → 82.7%（第2回）

3年：77.6%（第1回） → 91.4%（第2回）

この5点から見える共通の課題は、自ら進んで物事に取り組むという意識が薄いということである。これは昨今の中学生に広く共通する姿勢かもしれないが、やはり本校でも「自ら考える」「自ら判断する」「自ら行動する」という意識は薄く、与えられた課題や学習に対して真面目に取り組むことはできるが、主体的に行動するという点の弱さがうかがえる。しかし2年生、3年生では「進学」という目標が明確になるにしたがって、「学習には自ら進んで取り組むことができている」という項目で上昇傾向が見られ、また連動して時間の使い方に関する項目でもパーセンテージが上昇している。この点から考えられることは、目標が明確になれば、主体性も上がり、時間の使い方に関しても考えることができるようになっていくということである。この点を把握した上で注目すべきポイントは、「自分には将来、やりたいことや挑戦したいことがある。」という質問項目についてである。これは2年生、3年生と進路の道筋が明確になるにつれ、下がる傾向が見られている。進路が明確になり、やるべきことに主体的に取り組む、連動して時間の使い方も工夫するようになるが、一方で将来の夢や希望に関しては意識が下がっている。これは今後自分たちが直面していく将来を見据えた時に、夢や希望があまりもてないということを表していると考えられるため、行事や総合的な学習の時間など、外部との様々な接点をとることができる時間を活用し、仕事を実際に経験したり、職場の人に直接その仕事のもつ魅力を尋ねたりすることで、仕事の魅力や人と人とのつながりに夢や希望がもてる機会を作っていきたい。日々の学校生活では様々な人に接する機会はどうしても限られてしまうため、現在、予定されている活動を最大限に活用し、より多くの人の姿に接する機会を意図的に仕組んでいくようにし、その上で将来の社会や自分の姿に夢や希望をもっていけるような土台を作っていきたい。

(2) 保護者による学校評価結果より

保護者のアンケートに関して全般的に言えることは「あてはまる」「ややあてはまる」の合計パーセンテージは生徒のものと遠くない傾向にあるが、「あてはまる」よりも「ややあてはまる」のパーセンテージが高いという結果が見られる。

また、生徒のアンケート結果と比べた際には、多くの項目で生徒の判断と保護者の判断には多少の乖離が見られた。その中でも特徴的だったのは、自ら学習に取り組んでいることの様子や、時間の使い方に関する質問項目である。各家庭での生徒の学習に対する取り組みに関しては、生徒の判断に反して保護者の視点からはあまりできていないと判断している傾向が強かった。中学校の家庭学習は小学校のように一律同様の物が提示されるわけではないため、定められた家庭学習がないということに不安をもつ保護者がいるのは確かである。中学校の家庭学習でも教科によっては日々やるべき課題は出されており、全てが生徒にやるべきことが委ねられているということではないが、種々のテストに向けて自ら調整を図り、学習を進めていくことに重きを置いているのは事実である。よって、三者面談等の保護者との対話において中学校における学習への捉えを丁寧に説明することで、家庭学習への取り組みに対する視点の共有ができ、より生徒の学習に対する理解を深めていけると考える。

また一方で、本校の授業に関して、基礎的な学力が身に付いているという質問項目に対しては76.9%（第1回）から74.7%（第2回）、理解を深めるための工夫に関する質問項目に対しては75%（第1回）から77%（第2回）と80%を割る結果として表れていた。これに関しては今後も社会で

必要となる資質能力を見据えた上で、今、学習を通して身に付ける基礎的な力は何かということ問い続け、その力をつける授業を工夫することで、授業改善を図っていきたい。

2 本校グランドデザインの重点項目とアンケート結果の関わり

1では、学校評価アンケートの結果から、パーセンテージに注目しながら課題を挙げた。それぞれの課題に対する方向性を示した。次に本校グランドデザインの重点項目に係る質問項目に視点を移し、本校生徒、職員、保護者の捉えを確認していきたい。



図1 グランドデザインの重点項目

本校グランドデザインにおいて、今年度の重点項目としたのは「確かな学力」「豊かな感性」「たくましい心身」の3点であり、この3点を日々の活動を通して充実させることで、「未来を拓く生徒の育成」に向けていく。よって、この3点に係る質問項目の結果から本年度の教育活動が機能していたかを伺うことができる。そこでグランドデザインに関する質問項目とそれに対するアンケート結果を以下の「学校評価の分析(表1)」のようにまとめた。この結果からは本校の重点項目に対しては、生徒、職員、保護者共におおむね達成していると捉えていることがわかる。下方矢印で示された項目が3点あるが、これは発達段階における学年の特徴と捉えることができる。「あいさつ①」における2年生の表れは中学生によく見られる傾向で、1年時には大変元気だった挨拶が、2年時に少し落ち込み、そして3年時には大きく回復するため、挨拶の大切さに触れながら成長を見守っていききたい。また、「主体的な学び②」と「主体的な学び③」における1年生の表れに関しては、小学校からの変化において生徒自身が感じるギャップの一つである。様々な点において求められる力が小学校時のものとは変わるため、生徒自身が「できていない」と判断する傾向が強いのも自然なことである。しかし、そのギャップをなるべく少なくしていくために、幼小中一貫研修など、小中交流を通して、目標とする姿や身に付ける資質能力を共有し、義務教育9年間をかけて育む目指す姿の共有を図っていききたい。

表1 学校評価の分析

		学校評価（経営の重点）の分析											
		1学期（1回目）				2学期（2回目）							
		対象	◎	○	△	×	◎	○	△	×			
1	あいさつ ①	光が丘中学校では、あいさつを大切に自らあいさつしようとしている	1年生	22	78	0	0	71	27	2	0	↑	
			2年生	66	34	0	0	56	40	4	0	↓	
			3年生	57	40	3	0	55	40	5	0	→	
徳	あいさつ ②	家族や地域の方に対して進んであいさつができる	1年生	62	37	1	0	64	32	4	0	→	
			2年生	64	28	7	1	70	25	5	0	↑	
			3年生	59	41	0	0	72	26	2	0	↑	
			(保護者：子供は家族や地域の方にあいさつがよくできている)	保護者	37	51	12	0	38	56	6	0	→
			(職員：社会のルールや公共のマナー（挨拶・言葉遣い等）など機会あるごとに適切に指導することができた)	職員	17	83	0	0	50	50	0	0	↑
2	主体的な 学び①	光が丘中の授業では目標や課題が明確に伝えられ、何を頑張ればよいか分かりやすい	1年生	58	41	1	0	52	46	2	0	→	
			2年生	44	49	7	0	50	46	4	0	↑	
			3年生	52	45	3	0	53	43	4	0	→	
			(保護者：光が丘中の授業では理解を深めたり、意欲を高める工夫がされている)	保護者	20	55	23	2	18	59	20	3	→
			(職員：主体的に学習に取り組むための授業構想や手立てを意識したか)	職員	33	50	17	0	30	50	20	0	→
知	主体的な 学び②	光が丘中の授業では、仲間と協力して課題解決に取り組んでいる	1年生	78	23	0	0	73	27	0	0	↓	
			2年生	58	38	3	0	67	31	2	0	↑	
			3年生	64	35	1	0	74	26	0	0	↑	
			(職員：生徒の興味関心を高め、主体的に学習に取り組むよう指導方法や指導形態を工夫したか)	職員	8	92	0	0	20	70	10	0	↑
			3	行事への 取り組み	学級・学年の行事や生徒会の活動に、協力して全力で取り組もうとしている	1年生	69	29	2	0	80	16	7
2年生	62	35				3	0	67	31	2	0	↑	
3年生	69	29				2	0	71	28	1	0	→	
(保護者：光が丘中は行事、生徒会活動、部活動などに子供が生き生きと取り組み、活躍の場を設けている)	保護者	34				58	8	0	33	59	6	2	→
(職員：行事への取り組みを通して、学級への耕しと学級づくりが進んだか)	職員	8				92	0	0	50	50	0	0	↑

3 学校関係者評価

本年度の学校運営協議会では、学校評価のまとめに対して、委員の方々から次の点について助言をいただいている。

- ・生徒が自ら進んで学習に取り組むためには、学習の目標や意味を明確にすることが、学習意欲の向上につながるだろうということ
- ・将来の希望に対する結果に対しては、将来の社会に生きる自分を具体的に想像し、学校での学習や行事で身に付けていることが、そこにつながるというビジョンを示すことが必要だということ
- ・生徒の自己評価が低いように感じるため、相談されたことを丁寧に聞ける機会が増やせるとよいのではないかとということ
- ・あいさつでは、ただ単に大きい声というだけではなく、対面している人の様子を見て、どのように対応するのがよいかを判断することが大切であり、この判断のしかたは他の場面でもつながるのではないかとということ
- ・複雑な家庭環境におかれた生徒については、丁寧に状況を把握し、より良い支援策を考え、迅速に対応すること
- ・どの生徒も安心安全に学校生活を送ることができるよう、尽力すること
- ・いじめについて、またいじめが解決した事例に対する判断について、確実な対応を考え、迅速に対応すること

4 今後に向けて

(1) 生徒に関して

アンケート結果から、全般的に主体的に行動するという点の弱さがうかがえるが、学校生活における諸活動において、生徒が自分たちの目標を見据え、そこに向けて一步を踏み出す意欲につながっていないことが懸念される。これに関する一つの要因として、努力を重ねた上での達成感を得られる体験や、成功体験の不十分さが考えられる。コロナ禍を経験した生徒の多くが、人と人との接点を余儀なく断ち切られる状況の中で学校生活を送ってきた。よって、人間関係に過度の不安を覚えたり、自ら一步を踏み出す意識をもちにくかったりするのは、理解できないことではない。しかし、そのような環境下であっても、本校生徒が生徒同士や生徒教師間の人間関係をおおよそ良好に保っているのは、もともと生徒が持っている素直さや純真さといった素性の良さによるものだと考えられる。だからこそ、その生徒のもつ素性の良さをさらに伸ばし、将来の自分に向けて一步を踏み出していける姿勢を育てていきたい。

そこで行事や特別活動のあり様を熟考し、それぞれの活動の目的や、活動を通して身に付けられる資質能力の明確化と共有をした上で、機会の充実を図っていきたい。行事や部活動では、生徒が主体的に考え、実践していく場면을意図的に準備し、自分たち自身で物事を進めること場面を多くすることで、自ら判断し、人と関わり、行動していくことの楽しさを実感させることができる。当然、その過程で、うまくいかないことや失敗に直面することもあるが、その危機をどう乗り越えるかについても、生徒同士の話し合いを通して解決をはかることで、生徒は自身で成長する実感をもつことができる。そんな姿に向かうように教員は生徒を見守り、サポートしていきたい。それを繰り返し、仲間と協力して一つのことを成し遂げていくことで、「自ら考える・自ら判断する・自ら行動する」ことの大切さを味わわせ、主体性を育てていきたい。

また、不登校生徒や複雑な家庭環境の生徒、いじめを受けた生徒については、必要に応じてケース会議を行い、多数の目でよりよい支援策を講じている。今後も、学校運営協議会の委員の方々の力を借りながら、区社会福祉課などの外部支援機関とうまくつながり、一人一人の子供に目を配り、教育活動を続けていく。

(2) 保護者に関して

上記の結果から、保護者と教員の考えに大きなずれがあるとは感じられない。全ての教育活動を続ける上で保護者の理解は最も重要な押さえの一つであるため、常日頃から活動の意義や目標を共有することは必須である。しかし、活動を続けていく中で小さなずれは必ず生じるため、日々の連絡や確認を丁寧に行っていくことが、ずれを埋めることにつながっていく。

そこで、まずは保護者との連絡を密にとり、信頼関係を構築することで、ともに学校を作っていくという意識を確かなものにする。欠席時の電話連絡や家庭訪問、学校・学年・学級だよりなど、基本的なところを積み重ねることを押さえながら、一人一人の生徒の様子を常日頃から把握し、その生徒のもつ魅力や課題をいつでも保護者に伝えられるようにしておきたい。保護者は当然「我が子」を一番として考えるが、同時に私たち教員も一人一人の生徒の未来に対して真剣に向き合っているという意識が保護者に伝われば、保護者の安心感と信頼に結び付き、ひいては学校に対する信頼感の構築につながっていく。

保護者と学校の間で信頼関係が構築できれば、学習支援についても学校の教育目標や様々な活動における意図が伝わりやすくなるため、学校と保護者の間で同じ目標に向かいながらも、異なる視

点、異なる役割で生徒の学びに寄り添うことができる。

(3) その他

学校という学びの場には、多くの人に関わっている。それだけ多くの人に関わるときに、考え方や価値観の違いは当然生じるものであるが、それぞれの人と人との間で、目標を共有し、互いの立場を尊重しながら大人同士が協力体制をとることができるかどうか教育の充実に大きく影響を与える。普段からコミュニケーションを密にしながら、大人同士が協力して生徒が向き合う課題に環境を作っていきたい。